

第 3 3 期川崎市青少年問題協議会

第 3 回専門委員会 会議録

日 時 令和 7 年10月28日（火） 15時～16時45分

会 場 川崎市役所本庁舎 3 0 4 会議室

出席者

（1）委員 7名

柴田会長、香山副会長、平塚委員、堀口委員、永野委員、新山委員、前川委員

（2）傍聴者

なし

（3）事務局

大原担当課長、山本課長補佐、福本担当係長、植村職員

配布資料

資料 放課後等の子どもの居場所づくり 今年度の取組について

1 開会

- ・会議趣旨の説明
- ・配布資料確認
- ・会議公開についての説明
- ・会議成立についての説明

2 議事

放課後等の子どもの居場所づくり 今年度の取組について

事務局：資料を基に説明

平塚委員：2つ質問がございます。1つ目は、この地域を試行的取組の実施場所として選んだことについては、説明で理解しましたが、こども文化センターを会場として選んだ理由について伺いたいです。2つ目は、こども文化センターは基本的に平日21時まで開館していると思いますが、通常18時から21時までの時間帯に中学生向けにどのような活動をしているのかをお伺いできたらと思います。

事務局：まず大師こども文化センターを選んだ理由ですが、実際に南大師中学校に伺った際にも、生徒がこ文にお世話になっているというお話しがあったので、こ文を日常的に居場所としている子がいるのではないかとというところが1つございました。また今回、試行実施を行っていく際に、子どもたちが来る居場所はどういったところかを考えたときに、やはりこども文化センターは、日常的に開けている場所なので、今回取組を実施するに当たっては、日常的、常設の居場所としての大師こども文化センターでやってみることで、様々な子どもたちが来てくれるのではないかと考えました。参加した子どもたちがどういった子どもたちかを見ていけるかなというのがあったので、大師こども文化センターを選んだというところでございます。

こども文化センターで中学生が18時以降、どういった過ごし方をするかということについては、場所にもよるところはありますが、例えば学習室を18時以降は自習室として開放して子どもたちが勉強する場所としているところもあれば、集会室は特に何かイベントをしているわけではないですが、子どもたちが体を動かしてドッチボールをしたり、バドミントンをしたりと軽い運動をしているような場所でもあります。ですので、静かに勉強をするというのあれば、体を動かすというのもありますし、自由に子どもたちは思い思いのことをしているというのが一般的なのかなというところでございます。

平塚委員：ありがとうございます。そうすると今回の試行実施で来た中学生のある程度の方たちは、もともとこども文化センターに来ていた方たちだと考えたらよろしいでしょうか。

事務局：そうですね。先ほど申し上げたように私も何度か参加しましたが、この取組を

行う前から日常的に来ていたという子どもも結構いました。

平塚委員：そうしますとこども文化センターは青少年問題協議会で議論している中学生ぐらいの年代の子どもたちの放課後の居場所として有望な場であると考えていい、ということでしょうか。

事務局：少なくとも、日常的にある常設の施設としては、こども文化センターは間違いなく居場所として有力な場所なのかなとは考えております。

平塚委員：ありがとうございました。

事務局：何か他にありますか。

前川委員：資料の中で、軽食・飲料を準備し、来館した児童生徒と「食」を通じたコミュニケーションという記載がありますが、普段こども文化センターの中でそういうことができる（飲食ができる）部屋がそうになったのか、それともそうでない部屋が試行的取組によってそうになったのかというところを教えていただければと思います。

事務局：基本的にはもともと飲食ができる部屋でございます。逆にこども文化センターの中でこの部屋だけが飲食ができて、他は飲食ができない部屋となっております。ただ、普段は軽食、飲料が置いてあるわけではなく、今回は「食」を通じたコミュニケーションということで、社会福祉協議会の協力もいただき、軽食、飲料を置いてみて、食べ飲みしながら過ごしてもらい、あえてそういった環境をつくって居場所を工夫したというところは普段とは違うところです。

前川委員：ありがとうございます。もう一つ聞きたいのは、こども文化センターは、こういった取り組みを実施する時、アレルギーとかを厳しく管理する傾向にあると思いますが、そういったところはどのように折り合いをつけたのか、それともつけていないのかを教えていただければと思います。

事務局：こども文化センターの中でも例えばこの部屋以外では飲食をしてはいけないとか、色々なルールがあるのは事実です。今回、この取組をする際にこども文化センターにも話はしていて、もともとあるルール、例えば机の上に乗ってはいけないとか、他人に迷惑をかけてはいけないといった最低限のルールは守ることは当然ですが、基本的には子どもたちにあまり干渉せずに適切な距離感で見守るということで進めておりました。そういう意味では普段のこども文化センターこそうかもしれません、あまりこちらから、これは駄目、あれは駄目というふうにはできるだけしない形で進めています。これについてはこども文化センターとも事前にお話をして、そこは理解を得ながら進めていきました。

アレルギー対応については、準備した軽食・飲料の裏の成分表示をわかりやすいよ

うに提示しており、事前の案内のチラシの中でも、保護者の方にはお子さんに対して、アレルギーについてはきちんと伝えてくださいということを案内しました。その上で、子どもたちのほうで判断して、食べられないものは食べないというようにしてもらいました。

前川委員：そこに関しては、事前に何か申込書とかも取らずに、当日ここに来たら、自分の判断で好きなように食べられるとしたということによろしいですね。

事務局：おっしゃるとおりです。

新山委員：指定管理者が替わると替わりましたと挨拶に来られますが、学校も状況が替わってしまうようなリスクな部分もあるのかなと見ています。こども文化センターという場所は、小学校の頃から来て、中学校になっても行っている子ももちろんいるので、子どもにとってはそんなにハードルが高くない場所だからこそ集まる子もいたのかなというように感じて見えています。やはり普通の子が少し行ってみようかなと寄れるような居場所という論点では、みんなが集まれる、完璧ではないけれども、そういう方向性としてはいい空間だったのかなと思いました。

事務局：ありがとうございます。柴田会長、何か御意見はございますか。

柴田会長：事前レクの際にアンケート結果についてお伺いしましたが、居場所が「ない」と回答した子がほかの項目にどのように回答しているかが気になり、事務局に確認していただきました。今回、南大師中学校区で居場所が「ない」と回答した子は中学校2年生の子で、保護者から勧められて参加をされていて、ここでの過ごし方には今回は満足できなかったという評価をしていたということで、やはり中学生をターゲットとして今回子どもの居場所を考えていくという当初の考え方と合致していたのかなと思いました。保護者から勧められて参加したということは、やはり保護者に情報を届けるということも一つ大きな子どもの居場所をつくる上での大切な視点だということがここから分かったのかなと思いました。

どんな中学生でも大人の意図がないような空間で自由に過ごすことができる居場所をつくるということが必要ではないかと思っていますが、先ほど前川委員が質問されたように、飲食ができるスペースをしっかりと確保することと、やはりこういった取り組みを行う上では、アレルギーの問題をしっかりと見据えて行う必要があるということと、あと子どもたちに近い高校生や大学生、20代の若い相談相手が、メンターとして居るということも大事ではないかと思いながら御説明を伺いました。

事務局：ありがとうございます。以前、平塚委員が学生は様々な活動をされている方もいるとおっしゃっていて、行政が知らないだけなのか、それともつながりをなかなか行政と持っていないのか、そこら辺について何か御意見をいただければと思います。

平塚委員：学生もやはり30年ぐらい前と比べると生活が厳しくなっているので、以前は、ボランティアをする経済的条件が今よりあったと思います。近年、生活がいっぱいいっぱいの学生が増えており、そういう場合は、社会的活動をやりたいと思っても、空いている時間はアルバイトで稼がなければいけないといった事情もあります。そのため、稼ぐこともできる社会貢献活動は、参加しやすいです。学習支援などですと、交通費だけではなく最低賃金に近い程度の謝礼が出るところもあります。子どもたちへの学習支援の活動とか、子ども食堂の活動とか、学生たち自身も少し謝礼が得られるようなところは、学生も意欲的に関わりやすいのだなという印象はあります。

一方で、学生たちの活動する場所は大学や家の近辺とロケーションに限られます。行くためだけにお金も時間もかかるところは難しいためです。今年、私たちのゼミが川崎市の方々に御協力いただき、川崎市の様々な子ども、若者の現場にお邪魔させていただきましたが、川崎区の現場に伺った話を聞いている中で、区内に大学がないという話を聞きました。そのため川崎区の現場では、大学生のボランティアを得ることが難しいというお話でした。

一方で、多摩区の現場の方々は周囲に大学が幾つもあるので、大学生のボランティアには困っていないというお話をうかがいました。ですから、そうした地域環境もあるんだろうなと感じました。

事務局：大学のある場所は、当然、大学が終わった後にボランティアや報償費をもらってアルバイトというのもあると思いますが、大学と自宅の動線上というところでも、川崎区とかは難しいという感じでしょうか。大学生は学校が終わった後、学校の周りや自宅の周りが主たる活動場所になるのでしょうか。

平塚委員：家と大学の動線の間があまり出てこないのは、出会いのきっかけがないだけだろうと思います。自宅の周りは、情報が入ってきやすいでしょうし、大学には地域連携やボランティア関連のセンターがある場合が多いので、そういったところで情報を得られます。

堀口委員：たまに厚生館福祉会、さくら、白山愛児園とかのボランティアを大学で募りますが、遠いと言われてしまい、やはり地元の人しか行けないんですよね。確かに川崎区に大学がないというのはあるかもしれませんが、住んでいる人がどこにいるのかもあるのかなと思っていて、地元では、例えば警察の少年相談・保護センター関係のボランティアをしている人もいます。ボランティアとか有償ボランティアとかをやっている人はすごくやっていて、そんなに真面目に今からやっているのと驚くような人もいます。だから、ボランティアをしている人はいると思います。ただ、場所としては、大学の周りという人はあまりいなかったような気がします。確かに地元が多いかなという感じです。アルバイトは学校と家の間がアルバイト先というのは聞きますが、ボランティアではあまり聞いたことがないなという感じがしました。

事務局：ボランティアは、個人で興味、モチベーションを持ってやっているのか、大学

生としての一定のグループがあってその中で動いているのか、印象としてどちらが多いのでしょうか。

堀口委員：大学によって違うかとは思いますが、私の大学は、割と個人プレーの人が多いので、個人で地元でという人が多い気がします。

平塚委員：大学にセンターのようなものがあるのでしょうか。

堀口委員：一応、大学では子育て支援の取組があって、近所の親御さんやお子さんをお呼びして、子育て支援を行ったりしますが、それ以外は特に何かボランティアでつないでとか、マネジメントしてみたいな機能は私の大学にはあまりないですね。

事務局：前川委員、今の子ども会の状況等を教えていただけないでしょうか。

前川委員：今までのお話を伺って私が思う課題が、子ども会のような既存のオープンな地域の組織が、大学の学生たちの新規参入を求めているというところでは。私は全国組織の事務局に籍を置いています、これまで（子ども会の）経験のない、馴染みのない人たちを子ども会自体が受け入れている現状を事例としてあまり聞かないかなというところでは。要は、子ども会の活動の中で、小学生から活動して、中学生、高校生、大学生と、それでも活動が続けていく人たちは残りますが、大学生になって、小学生から子ども会活動を一切やっていないけれども、大学のボランティアでとか、大学生になって時間が空いたから子ども会にというケースは、ほとんど聞いたことがありません。そこのマッチングが必要かどうかというところもあるとは思いますが、現状、子ども会の中では、その経験を持っている、もしくは所属していた経験の人たちは残りますが、新規で受け入れているというか、新しく大学生世代が子ども会の中に入ってというのは、ケースとしてはないかなと私も聞いております。

事務局：ありがとうございます。次回、あかい屋根の阿部さんに話を聞きに行きたいと思いますが、結局、大学生が社会参加するというのは、個人のパーソナリティもあるかと思いますが、ずっと地域で育ってきた経験は大きいと思っています。阿部さんは菅生こども文化センターに小学校4年生ぐらいから参加し始めて、中学生になってもお手伝いして、高校生になっても続けていて、市の職員で働いた後もなお参加してというように地域で育ってきた方だと思います。今、前川委員がおっしゃったとおり、流れもなく突然参入するのはかなり厳しいのだと思います。

平塚委員：今のお話は本当に私もそのとおりだなと思います。こども文化センターに長い期間関わっていて、指定管理が入ってからは主体が替わるということもあるとは思いますが、そこで育った人が、自分が高校生、大学生になった頃に、今度は自然と手伝いに関わるという流れが起きているところはどれくらいあるのかということは何いたいと思いました。それはとても自然なことだと思います。

事務局：私は長く青少年行政に携わっていますが、自分の知っている限り地域と一体となって運営して、それが持続し続けているのはふれあい館と菅生こども文化センターかと思います。先ほど新山委員もおっしゃっていましたが、館長さんが替わると結構大きく替わってしまって、これまで市民活動センターの職員が運営するということを前提にやってきたので、館長さんの裁量で運営の内容が大きく変わってしまっているのが川崎市の実態かなと思います。

一方で、こども文化センターの課題として、全体の考え方として中学生や思春期以降のお子さんを、大きくターゲットとして市も求めているわけではなく、恐らく指定管理施設をまず安全にきちんと運営管理してくださいという内容でモニタリングしていたのと、アウトプットとしての一定のイベントの回数とその参加者の人数や、他とは違うことをやっているのか、やっていないのかというところに評価の重きを置いてきたので、市のモニタリングを評価基準にせずずっと運営していたのかなとは思いますが。おそらく指定管理者にも問題があったと思いますし、市のモニタリングと評価の在り方にも問題があったのだと自分は思っています。

前川委員：こども文化センターで臨時職員として働いている人たちは、少なからず、こども文化センターやわくわくプラになじみのある子たちが戻ってきている印象があります。その理由は幾つもありますが、先ほど平塚委員が今の学生は貧しいというお話をされていたかと思いますが、本当にお金を稼ぎたかったらおそらくこども文化センターでバイトはしないと思っています、というのもこども文化センターは働く時間が圧倒的に短いと思います。こども文化センターの臨時職員は、基本的には18時から21時という時間に働くことになります。さらに、こども文化センターは駅に近いところもありますが、全ての施設が駅に近いわけではないので、そうすると、必然的に家の近くになると思います。それで3時間ほどしか働けないというのは、本当に稼ぎたい学生からすると非常に難しいかなと思っています。

ここで議題にしなくてはいけないのは、こども文化センターを考えたときに、子ども運営会議と運営協議会の2つが大して運営できていなかったところに構造的な問題があるのではないかなと思っています、館の運営全体、運営協議会の中で、子どもや、青少年、高校生、大学生相当ぐらいの子たちがそういう会議に参加するという事例があまりないかなと思っています。そういう意味で、担い手として、職員が事業を運営するという考え方にどうしてもなりがちだったのではないかと、私もこども文化センターの臨時職員をアルバイトとして学生時代にやっていた経験もあったので感じました。学生のアルバイトは、誘ってもそんな時間しか働けないのとか、夏休みは稼げてもそれ以外は本当に微々たる額だったなと思うと、何か別の理由、稼ぎたいという理由以外がそこに必要ではないかという気がします。そういう意味で言うと、臨時職員や学生たちは私が知っている子たちだとそこで働きたい子は、子ども会の子やこども文化センターで何かしらの体験や、運営者が替わってもこども文化センターに親近感を持っている子たちが戻ってきている印象があります。

事務局：ありがとうございます。担い手の話で、運営協議会の話と職員がプレイヤーになってしまっているという話があったかと思いますが、運営協議会自体は民営化したときにかなり目玉の部分でした。基本的に館長はいるけれども、意思決定は運営協議会でやるということで、館長が意思決定をするのではなく、運営協議会でルールを決めていく。運営協議会として館ごとにメンバーがいて、今も大学生のアルバイト代表やボランティア代表が入っているところはあるかもしれませんが、前川委員がおっしゃったとおり、運営協議会をきちんと機能させているところと、もうそれもルーチンになってしまって、回数さえこなしていれば行政からの評価としては及第点の評価はもらえてしまうというところもあります。そこら辺が運営協議会というかなり目玉だったものが今形骸化してしまったという事実であります。

事前レクの際に、担い手は地域の人に期待されることもあるし、職業人として期待されていることもあるということを平塚委員がおっしゃっていましたがコーディネーターの話とは別にして、居場所の担い手の話というところでまた少しお話ができればと思いますがいかがでしょうか。

平塚委員：先ほど前川委員がお話くださった臨時職員のお話は非常に興味深く伺いまして、やはり実態をどこかで知ることができるというなと思いました。今臨時職員をされている方々に、これまでこども文化センターで過ごされた経験があるかというようなことをお聞きできたらと思いました。青少年問題協議会でも以前お話ししたことがあるかもしれませんが、三鷹市はもともと児童館だったところを7、8年前に全ての年齢層に開くということで、児童館と生涯学習センターを1つにして多世代交流センターにしているのですが、そこには若者スタッフという有償のアルバイト的なポストがあります。なぜそれができたかという、先ほどの大師こども文化センターでもすでに常連になっている子たちがいてというお話でしたが、他でもやはり、あまり家に帰りたくないとか、お友達と一緒にいたいという子たちが閉館ぎりぎりまでいるということがあります。場合によっては閉館しても近くの公園に移動してそこにいるということが三鷹市の場合もあって、そんなにこの場所、この仲間が大事なのであれば、もう少し役割を持ってやってみる？ということで高校生年代以上の若者たちを対象に若者スタッフというポストを設けたようです。そのため三鷹市の場合は専任職員と嘱託職員と若者スタッフがいて、さらにボランティアのような方たちがいます。

今の事務局のお話との関わりで言うと、そういう多層化された担い手層がいるということはとても大事なことに思えました。例えば三鷹市の場合も、市の直轄の場所なので専任職員の方は数年間で異動があります。そのため、その方たちの主な仕事は市との調整といったバックヤードのことをしていて、子どもとそんなに触れ合っているのは嘱託職員の方たちです。その人たちが、若者スタッフと一緒にしながら子どもたちとのいろいろな関わりの担い手になっていて、嘱託職員の人たちからすれば若者スタッフに対するリスペクトが非常にあります。若者スタッフをしている人たちは3歳ぐらいからそこに来ていて、自分たちよりもはるかに長くその場を知っていて、その場の文化を身にまとい、だから彼らがここではそういうことをやってはいけ

ないとか、ここではそれはいいのではないかということ、一目置いて話を聞いています。いわゆる大人だけでその場のコントロールをつくっているわけでもないということです。

先ほどの臨時職員の方で、もしもそうしたある種のOB、OG層の中でよりポジティブな人たちがいらっしゃるのであれば、その人たちに三鷹市の若者スタッフのような役割を位置づけられる可能性があるのではないかと思います。ただ、その人たちだけに任せるわけには当然いかないので、実際に最前線で子どもたちと関わるある程度ベテランになっているような、それを仕事にしているような方たちの存在も必要ではないかと思います。

事務局：ありがとうございます。南大師の取組に自分も参加してみて、子ども自身の声を聞いたり、関係性をつくっていくのは一定年代が近い人でないと難しいなと思う一方で、町連の会長さんや民児協の会長さんも見に来てくれましたが、いわゆる中年から高齢者の世代が何の役にも立てないのかと考えたときに、子どもたちの相手というよりもその居場所の環境自体を整える役割を期待されているのではないかと思います。環境をつくっていくことを若い人に期待しても難しいのではないかなと思ったときに、中年から高齢者の世代にもお願いすることは出てくると思っています。

若い方たちとそれ相応の経験とキャリアを積んでいる方たちに期待することは、それぞれ違うのだと思います。今度、南大師の取組で町連の会長さんと民児協の会長さんとで振り返りを行います、おそらく地域の人から見ると中学生は小学校低学年に比べたらコミュニケーションが取りづらいのだと思います。だから、私たちは何をすればいいのかということ、をすごく聞かれそうな気がしています。自分が今思っていることに対して御意見がいただけたらと思いますが、柴田会長から何か御意見はございますでしょうか。

柴田会長：今、御説明いただいたように、中学生、高校生の若い子どもと実際に関わるナナメ上の関係性にある大人は、若い大学生あたりの20代ぐらいの方たちが最適なのではないかと思います。一方で地域に精通しているもっと上の世代のキーパーソンと言われるような地域の方々には、コーディネーターとしての役割をしっかりと担っていただくということが必要だと思います。子どもと実際に関わる若い大人と、それら全体を俯瞰してコーディネートする大人のコーディネーターが必要だと思います。こういうコーディネーターは、地域に長く住んで精通している方が最適ではないかと思います。私は、学校運営、地域と学校の連携というところに関わっていますが、最近、国の仕組みであるコミュニティ・スクールの取組があります。川崎市も、今、取り入れ始めていて聞いております。こういったコミュニティ・スクールの学校運営協議会などには地域の代表者、保護者の代表者がそれぞれ参加をしていますので、そういったところをコーディネートする、放課後子ども教室などの地域学校協働活動や、それから学校にもよるとは思いますが、地域と連携した学校の教育過程の中で行われているような活動を支援している地域のコーディネーターさんと、こういった放課後カフェのような活動も連携をして、教育委員会としっかり子ども支援部局が横連携をし

て、人材を共有したり、情報共有をしたりという仕組みを行政が積極的につくっていただければいいのではないかと思います。

他地域でそういう仕組みがしっかりつくられているところでは、その学区の学校で学んだ大学生がまたその学区に戻ってきて、例えば離れた地域の大学に通っている大学生であれば長期休みに積極的に参加をしたり、また自宅から通学をしている大学生はその地域の子ども支援の活動に熱心に関わったりという光景が見られますので、学校の持っている組織と子ども支援組織がつながるということが必要ではないかなと思います。

それから、平塚委員がおっしゃったように例えば大学生に協力を仰ぐ上では、学校、大学に通う通学圏内の定期が使えるような場所であったりとか、全くのボランティアではなくて有償ボランティアも視野に入れると学生の学びにもなってお財布も傷まないと思いますので、そういった活動にしていけることが必要なのではないかなと思いました。以上です。

事務局：ありがとうございます。今、学校の話が出ましたが、新山委員、コミュニティ・スクールのところは、学校によってばらばらかとは思いますが、そこら辺の状況や、先ほど私の申し上げたことで御意見があったらお聞きしたいです。

新山委員：（コミュニティ・スクールは）今年度、全校で教育委員会に行っていると思います。それまでは段階的に増えてきていて、学校によっては何年か積み重ねた学校もあれば、今年度やっと始まった学校もあるので、その差異はあるのかなと思います。基本的には子どもたちや地域の人、学識経験者なりも入れてやっていきますが、おそらくコミュニティ・スクールによっては結構様々な要求をしてきます。古いところは要求しているところもありますし、まずはスタート地点で何とかこなしてやっていくというところで、川崎市内でも、それぞれの学校、地域では差があるというのが私の認識でございます。

それから別の話ですが、教育委員会で寺子屋という事業を小学校は結構行っていますが、中学校は行っていないということで、この間も教育委員会の人が私の学校にどうにかやってほしいという話で来ましたが、やはり中学校は放課後の部活もあるので、すでに寺子屋を行っている学校はあるけれども、なかなか厳しいですよという話をしました。特に中学校で今実施しているところは誰が中心に行っているのかを聞いたら、やはり元校長先生ということで、元校長先生はその引継ぎはできているのを聞いたら、できないから結構長い間やっているという話をされていました。まずは行政がこの人ということをセレクトしてくれないと、なかなか学校現場で難しいところがありますよという話をしました。先ほどから行政がコーディネートしながらというのはなかなか変えられないところかなと私自身は思っております。

事務局：ありがとうございます。今回は若い人をどうするのかということと、地域の人はどう関わるのかといった担い手の確保が一番のキーワードになるかなと思います。今、新山委員がおっしゃったように、川崎市は地域包括ケアを推進していますが、た

だ、やはり今、一番表に出ている地ケアは国が従来やっていた高齢者の部分で、川崎市はいち早く子どもから障害者、高齢者までつながりをつくって、地域みんなで支える仕組みをつくっていくとしていますが、正直、一番具体的な仕組みになっているのは、昔からやっている地域教育会議やコミュニティ・スクール、学校や教育の分野です。しかし、そこはあまり区役所が絡んでいなかったり、それぞれが同じようなコンセプト、同じような取組を目指していますが、中の連携すらあまり取れていないようなところもあって、コーディネーターの話も含めて、行政で整理すべきことも多いと思っているので、引き続き次回以降もお話しさせていただければと思います。

永野委員から南大師の取組で事前に御質問があったということで、それにお答えしつつ、事前レクの際に堀口委員からも、どの子にとっていい居場所になっていて、どの子にとっては敬遠されてしまったのかという話もあったので、最後にそのテーマでお話ができればと思っています。まず試行的取組に参加した方の実人数が分かれば教えてほしいということでしたが、実数では取っていなかったのですが、7、8人くらいの子がほぼ毎回来ていて、他の子は来たり、来なかったり、2週間ぶりに来ましたとか、初めて来たけれども来なくなってしまった子とか、最後のほうだけ来ましたとかいう子がいました。客観的にみても、初めて来る子が入りにくい雰囲気にもしかったらなっていた可能性はあります。また来ていた子どもの学年層は中1、中2が圧倒的に多かったです。大体、延べで言うと50人ずつぐらいでした。

また、どこの層までは放課後カフェのような場所で支えられるか、どの層から福祉の場につなげないといけないかを考える必要があるという御意見については、まさにそのとおりだと思います。ただ、これはよく児童相談所長にも言いますが、今の川崎市の実態を見たときに児童館の職員は、子どもの意見を出させるテクニックは、むしろ児童相談所よりもあるかもしれませんが、アセスメントはできません。その状況が外形的に、この子の状況はこうですというのは分かったとしても、幾ら関係をつくっていったとしても分からないことだらけのことは多いので、支える目的がまた違うとは思いますが、本当に危機的な状況になっているかどうかの判断ができないということと、そうなったときにつなげる先がないと厳しいと思います。今回の取組に心理職の方に1日だけ来ていただいて、子どもに向き合った結果、心理職としての的確な状況把握はできていて、きちんと課題を可視化できたり、言語化できたりしているので、やはりみまもり支援センターや児童相談所の職員が定期的にアウトリーチしないと、永野委員がイメージするような話にはならないのかもしれませんが、先ほど平塚委員が投げかけていた若い人が持つ役割と、子どもたち自身の状況把握と支える人という、役割の違いが出てくるのかなと思いました。

最後に、実際に試行的取組をやって見えてきたメリット、デメリットについてですが、今回の取組を実施するにあたって、南大師の状況をもう少しきちんと客観データ、主観データで深掘りした上で実施したほうがよかったのかなという反省点と、地域の人を巻き込んでいくには、何を地域の方に期待して、何をやってもらえるのかというのがまだ整理し切れていないので、地域との意見交換ももっと必要なんだろうなと思いました。あとはメリットであり、デメリットでもあります。南大師というところ（地域）では、常に子どもたちが大人とのコミュニケーションを求めているという状

況は把握できたので、川崎区の南大師エリアは日常的に居場所が必要だろうと思いました。ただ、永野委員が懸念しているとおりの、子どもたちがグループ化していくとほかの子を排除するというのはあって、色々な子への配慮は必要になってくるので、それは関わる人だったり、空間だったりと様々な課題が出てくるのかなと思いました。

永野委員：丁寧な説明ありがとうございました。質問の意図がそのとおりなので、お答えいただいて、よくイメージが湧いてきました。

先ほどの担い手のところと重なるとは思いますが、やはり子どもと若者と関わる場所のナチュラルさとか、ピアメンターみたいな雰囲気はとても大事なんだろうなと思う一方で、やはりトレーニングされた中での親しみやすさの演出というか、先ほど柴田会長がおっしゃったみたいに若ければ誰でもいいわけではなくて、ピアメンターのよさとトレーニングされた専門家がどこかでギミックをチェックしているとか、つなぎの役割をしているとか、空間のコントロールをしているとかが必要ではないかなというのは改めて思いました。

またゾーン分けというのはとても重要なので、静かに勉強したい人たちのゾーンとギターが弾ける部屋やゲームができる部屋があったりとか、やはりゾーン分けのあるというのが多様なニーズにフィットしているのかなと思いました。

リピーターが多いのは別に悪いことではないと思いますが、リピーターが醸し出す雰囲気によって、その人たちがウェルカムな感じを出せばもちろん入ってこられますが、成長していくと少し入りにくくなるのはどこでも起こることだと思うので、そのあたりを職員というのか、担い手の人たちが、ある程度、調整したりファシリテートしていくスキルが求められるのかなと思いました。

事務局：ありがとうございます。大師こども文化センターに来ていた子を見て思いましたが、私が中野島こども文化センターで相手していた中学生は、ほっておいてくださいという感じが強かったですが、そこが南大師特有なのかはほかも見てもない分かりませんが、やはりコミュニケーションのハードルがとても低く感じました。麻生区の中でも柿生はそれなりに課題感があるところだと思いますが、柿生こども文化センターにいらっしゃった香山副会長どうでしたか。

香山副会長：まず、中学生、高校生世代が18時以降、残る人数は2、3人と非常に少なかったです。そしてやはり来る子はいつも同じでした。2、3人のグループ、コミュニティがあったので、我々職員が、求められれば入りますが、中に入って新たに刺激をしたりといったこともあまりしなかったです。けれども居心地がよかったのか、自分から事務室に入ってきて少し話に来たりとか、そういう中で関係を保っていたような気がします。ですから、南大師でこれだけ多くの子どもが大人との接触を求めている、それから、なかなか帰れないとか帰りたくない事情を抱える子がいるのだろうなということが分かります。

とはいえ、柿生にも帰れない事情の子はいました。保護者から一方的に我々職員は言われることがあっても、子どもの育ちに対して、お父様、お母様、こうしてくださ

い、こう協力してくださいということはなかなか言えなくて、結局、言われることが多い中で、一生懸命、事故がないようにということで、また、子どもから話を聞いてあげたりしながら、直接、それを親に返すということをまずはやっていました。しかし、時は流れて、低学年の子どもが中学年になったり、高校に入ったりというようなことでぽっと来なくなったり、自分は2年間しかいませんでしたが、あの子は何なのと聞いたときに、元々ここに来ていた子で、立派に育ってきちんと挨拶をして手土産を持ってきたりした子も何人もいたので、そういった意味では機能していたのかなと思います。

最初に資料を見たときに、こども文化センターの職員が実施したわけではないのだなと思って、ナナメ上の関係ということで若い世代の人に託してみようというのは、新しい試みとしては当然よかったと思いますが、あくまでこれはスペシャルプログラムであって、これをどう一般化していくかとか、裾野を広げていくかということはこれから大事なことになります。ただ、スペシャルプログラムとしては、この期間、若手の方たちを中心に接触したということは、非常に大きな一歩だったと思います。1、2回だけやるというのはよくあって、そのときだけ人が来るということはよくあります。私たちも様々な課題の中でどれだけ集客できるかということをよく考えていました。そこまでやらなくても、日常的に自然と彼ら、彼女らにとっての居場所になっていく。特に小学生まではいいけれど、中高生になって部活もあったり、塾があっても、その隙間の中を埋めてくれる、そんな関係の建物であったりとか、人の交流であるといいなと思いました。

平塚委員がおっしゃった多層世代の支援者というのはぴんときていて、いわゆる地域の市民の方たちの構造がいろいろ変わっていったり、活性化したり、それから、何か施策があって人がつけられたり、お金がついて何か新たな方たちが関わってきて動く部分があったりとか、行政の方たちがやっていくという型があたりとか、様々な形の中で担い手に関わってくるのだと思っています。資料10頁のステークホルダーになり得る様々な関わりを見ていたら、当然、市役所の中も各局が、そういった意味では、コーディネートする人間が出てこないといけないし、区役所もそうだし、本当に遠大な改革をしようということにもつながっていくのかなと思いました。

先ほど話にも出ましたが、自分は地域教育会議があったときの事務局をしていました。地域教育会議も5年、6年、7年、8年かけて全校になっていって、市民が段々と学校に関わってくるようになった時から20年、30年経ちました。地域教育会議や子ども会議が今どうなっているのだろうとなったときに、やはり段々と痩せていってしまっています。形だけが何とか残っているけれども、一番重要な部分というのは、世代が継承されたりとか、高齢化は当然だけれども、次の世代にそれがバトンタッチされて、おらが町のためにとか、自分のやりがいがあるんだとか、郷土愛とか、そういうものがあって、地域の母体が爆発的に活性化されることは難しくても、長い期間、バトンが受け継がれていって、世代がつながっていくというベースがあって、そこに新たな、例えば大学生の力とか、フレッシュなものになってとか、コーディネーター研修された人間が入っていったとか、それから、役所の方たちが新しい発想の下で入っていくとか、そういう多層的なものがトータルでないとなかなか変わってい

かないと思います。地域教育会議のときにいろいろな洗い出しをやったり、地域の代表が来て、いろいろ話し合ってきましたが、それと同じようなことをまた違う方向性から、今度はこども未来局の方たちがメインで考えているのかなと思いました。

1回、2回、3回の話し合いをただけでは変わらないかもしれませんが、絵に描いた餅で終わらせないで、きちんと検証しながら課題と成果を確認して、長い年月をかけて各局、区役所、こども文化センターの方たちも巻き込んで進めていけるといいかなと思いました。市の職員が実際に取組を行ってみたというのは、自分はあまり聞いたことがないし、すごいなと思いました。時間がかかるかもしれないけれども、つながっていけるといいかなと思います。

あと町田市为例を言いますと、町田市は小池都知事の肝煎りで、今年度から全校で校内にいわゆる教育支援センターというのをつくっています。要するに玄関を飛び出せない不登校の子どもたちに何とか学校に足向けさせてほしいということで、お金も人もつかないままに突然動き出しました。私のところはたまたま研究推進校だったので、2年間は人がついていましたが、それも切られてしまい、多少そういう習慣化された空間と人の流れがあったのでやっていましたが、まず1つ大きかったのは、町田市は給食が始まったということで、やはり食べ物があると俄然子どもは来ます。だから、夜の時間にやるのも分かりますが、やはり子どもたちにとって食というのは重要で、本当に食も充実されないお子さんたちもいるわけだから、そういうのもどこかでは補助的に考えていくといいのかなと思いました。

1つの部屋だと、来ている子は今まで鬱積した生活をしてきたから楽しくてワーワー騒いでしまって、ゲームをして、取っ組み合いをしてという子たちが多くなって、勉強したい子が教育支援センターだからと来たけれども、学習できないじゃないかということがありました。私の中学でも全く同じようにそういう子が来なくなっていました。たまたま空いている教室があったので、2部屋目をつくって、お勉強したい人はこっち、ゲームをやりたい人はこっちというようにすみ分けをしましたが、その分、職員が2人必要になってしまいました。先生方は、今までも授業が大変なのに、またそこに行かないといけないということで、非常勤職員が行くとなって、最初、私が行っていましたが、自分の経験で、やはり教員が行くべきではないかと思いました。先生が来れば、自分の在籍級に帰っていく、私はこの中学校の生徒なんだという意識につながっていったり、勉強も、何々先生、何とか教科のこの先生としゃべっているんだという状況の中で、本来の自分を思い起こしたりということがあるのかなと思いました。町田市では、学校の中でそういう居場所をつくろうと苦戦しながら今やっているということも一応紹介しておきたいと思います。

事務局：ありがとうございます。町田市の不登校の教育支援センターは、川崎市で言うとうゆうゆう広場という場所があります。教育委員会に聞くと、学校に代わる勉強や学習の前に居場所的な機能の部分の話はずっと出てはいて、ただ、こども未来局はこども未来局で不登校の子であれ、色々な子が自由に気兼ねなく来られる居場所ということを考えています。教育委員会にお願いしているのは、その上で、学校に行けない子にどういう教育を提供できるのかという部分をメインでというような感じになってい

ますが、やはりもともと文科省が学校には行かなくていいと言いながらも、結局のところ、最終的に出席は校長先生の御判断としていて、いわゆる学習評価はどこまでいっても学習指導要領に基づいて、そこがきちんとその学年ごとで適正にできているかみたいなことでやっています。正直言うと、なかなかゆうゆう広場でも学習機会を長くつくっていくのは難しいというお話はされていて、こども未来局はどちらかというと、不登校のお子さんに関しては基本的に、教育委員会主体で考えています。ただ、教育委員会とこども未来局でコミュニケーションは十分に取っています。

居場所に何が求められているのかということについて今、仮説的におおむね3つ思っています。日常的に家庭、学校以外で放課後に過ごす場所が、結構、時間も、目的もなくという子が多いところと、あとは、よく子ども意見箱やカワサキ☆U18の意見で出てきますが、とにかく学校が終わった後に友達と一緒に喋るところがない、ファミレスだとお金がかかる、あと勉強する場所がない、1人で勉強したいという子もいて、友達と勉強すること自体がコミュニティーになっている場合もあって、そういう居場所がないという。そういう意味で、忙しい中学生ですが、隙間時間で子どもたちだけで有効に時間を過ごしたいと思っている子と、あとはこれが一番学校の先生が見えづらいとおっしゃっていましたが、学校にも来ているし、少し休みがちだったりとか、部活も入ってはいるけれども行っていないとか、休みがちだった子に対する思春期特有のいろいろな悩みや葛藤のグラデーションが見えづらい子の居場所のニーズはあるんだろうなと思います。居場所のニーズに応じて、居場所の空間の置き方や、関わるスタッフの性質が、全部、違ってくるんだろうなと思います。

次回、事務局でまた論点整理をさせていただいた上で、柴田会長から実際に地域で様々な活動されている方の話もどこかで1度は聞きたいというお話があったので、阿部理事長には、青少協に協力してくださいという話は事前にしているので、そこら辺の進め方を事務局で整理させていただければと思います
何か最後に一言だけでもという委員の方はいらっしゃいますか。

堀口委員：今まで、居場所というと落ち着けるとか安らげるみたいな感じでイメージしていましたが、今日のお話を伺って、提供する居場所のフェーズが違っていいんだと思いました。いつも来ている子はいつも来ている子で過ごしていて、それでそこが居場所になっているかもしれないですが、もしかしたら来にくくなってしまった子がいたかもしれないというところと言うと、先ほど平塚委員がおっしゃっていたような子どもスタッフみたいな感じで、南大師の取組を横展開していくとしたら、いつも来ている子に何か役割を担ってもらおうという意味での居場所、役割がある、活動できる何かがあるという意味での居場所がその人たちにとっての居場所のフェーズ。あまりいつも来ていないけれども、ここに来たら静かにできるかな、安心できるかな、勉強できるかな、みたいな子たちの子ども同士の関わりみたいなものを調整するような役割を担ってもらってというのでもいいのかなと思いました。子どもの居場所を子どもがつくるみたいな感じで、子どもが多層でもいいんだと思って、事前にお話を伺ったときは誰の居場所になっているのかなと思っていましたが、そうではなくて、この子にとっての居場所は活動できること、この子にとっての居場所はここでとにかく落ち

着けることみたいな感じで、それをうまく調整する役割をナナメ上の大人に期待したいなという感じでした。なので、ナナメ上の大人に期待することという論点で言えば、直接子どもと関わるということもそうですが、子ども同士の関わりを調整するという役割もあるんだなと皆さんのお話を伺っていて思いました。

ですので、先ほど永野委員がおっしゃっていましたが、トレーニングは絶対必要だと思ったので、そういう意味では、行政に期待することとして、コーディネートの意味だけではなくて、専門職はいっぱいいますので、そういう専門職に、ナナメ上の大人と言われている人たちへのファシリテーションのトレーニングとかを担ってもらおうというのは行政の役割かなと思っています。ナナメ上の大人に期待することは直接関わることと子ども同士の関わりを調整することだと思って聞いていました。

地域に期待することとしては、地域の課題を行政につなげることなのかなと思いますし、あとは課題が出てきたときにリソースを探して参加に巻き込むというのが、地域で長く住んでいるから分かることなんだと思ったので、中高年や高齢者の人は直接関わって役に立ちたいという、世代継承もあったりするので、直接関わりたいという気持ちはあると思いますが、マネジメントに特化してもらう役割を担ってくださいねと、行政のコーディネートの人は言わないといけないのかなと思いました。

ナナメ上の大人に期待するという意味では、ナナメ上の人をどうするかみたいな話も出ていましたが、長期的な話をすれば、参加している子どもに何か役割を担ってもらえば、きっと大きくなっても来てくれるということなんだろうなと、前川委員のお話を伺っていて思いました。私もずっと川崎で育っていますから、本当は事情が許せば帰ってきて多摩区のために何かしたいと思っているので、実際、こども文化センターが生田緑地でやっているオリエンテーリングがすごく楽しかった思いがあって、枳形のこども文化センターに少しだけ行って、わくわくプラザのスタッフもやって、市の職員もやってというふうにやってきたので、そういう意味では愛着があります。今、違うところに住んでいますが、川崎に戻ってきて何かしたいなという気持ちはあるので、そういう長期的な話をすれば、住んでいるお子さんに何か担ってもらうということをすれば、大学生になっても戻ってきてくれるんだなというのが今の委員の皆さんのお話の印象ですし、短期的には大学に協力を募ることが必要なのかなというふうに思いました。平塚委員の大学にはそういう仕組みがあると伺ったので、本当に人海戦術ですが、そうやって大学に協力を募って、川崎区にも来てもらえるようにするという感じなのかなと思いました。以上です。

事務局：ありがとうございました。他に御意見はありますか。そうしましたら本日いただいた御意見を見返して、また別途御相談をさせていただければと思います。

3 その他

事務局：それでは最後に、次第、その他ということで事務連絡をさせていただきます。

次回、第4回専門委員会は令和8年1月20日に実施予定ですので、また改めて通知させていただきます。回りの全体会については、専門委員会の後、令和8年3月下旬に予定しております。第4回専門委員会で話し合うことが見えてきた段階で、どのようなつ

くりの報告書にしていくのかというのは、また話をしていく必要があるかと思っておりますので、そこも含めて、第4回の専門委員会で話し合いができればなと思っています。

最後に、今回の会議録ですが、冒頭にもお知らせしたとおり、ホームページに公開予定ですので、会議録の案を1か月以内に事務局でまとめて、各委員に確認依頼をメールで送付させていただきますので、またよろしくお願いいたします。

4 閉会

事務局：それでは、以上をもちまして、第33期川崎市青少年問題協議会第3回専門委員会を閉会とさせていただきます。本日は、お忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございました。